

《コロナ禍の記録》

令和四年度卒業生総代謝辞（午後の部）

藁科 佳奈
（人間科学部心理学科）

冬の寒さも和らぎ、穏やかな春の陽気を感じられる季節となりました。本日は、このような式典を挙げていただき、誠にありがとうございます。佐々木学長、松木理事長、日高総長をはじめ、ご臨席を賜りましたご来賓の皆様、関係者の皆様にご心より御礼申し上げます。

大学での日々はあつという間の出来事のように感じられます。私は心理支援の専門家を目指して人間科学部心理学科へ入学し、この四年間で、同じ道を目指して思いを共有できる仲間、素敵な言葉をかけてくれる仲間と出会うことができました。

入学当初の私は、ネガティブなニュースを見れば、その印象だけで物事を捉え、すべてのことにはいつも、正解があるものだと思っていました。しかし、学びを深め、多様な価値観に触れていく中で、物事に正解を求めることは、時に自分の世界を狭めてしまうことに気づきました。答えのない問いに向き合い、様々な人と出会うことで視野が広がり、自身の考え方が日々変化していく専修大学での学びは、何物にも代え難い、大切な時間でした。

今、私の世界は入学当初から確実に広がりを見せ、物事を良し悪しだけでなく、様々な角度を変えて捉える



令和4年度卒業式(午後の部) 総代・藁科佳奈さん

ことも習慣化されました。大学生活で繰り返し行ってきた、自分なりの考えを作ること、あり方を問うこと、これまでの考えを捉えなおしてみることは、こんなにも大変なのかと思ったことが何度もありました。それでも、考え続けることをやめずに来られたこと、その過程で得たものは、これからの人生を豊かにしてくれるのだらうと思います。

仲間と共に学び、過ごした日々は、ありふれた日もどんな日も、貴重で、幸せでした。仲間たちの存在がこれからも、自分を支えてくれると思えます。

また大学での学びや研究は、その学問の世界の深さを感じる濃い時間でありながら、一人ひとりがちっぽけな存在ではないと感じられる時間でもありました。特に、学内や実習先で出会った、温かくも強い思いを持つた方々、世代を超える大きな枠組みで、自身の仕事を考える方々の姿が印象に残っており、私も、自分の行動をより大きな繋がりの中で捉えられるようになりました。加えて、教養科目や資格課程など自分の専攻以外の学問を学ぶことができた機会も、私にとっては大きなものでした。異なる分野の意義やその分野の世界との関わり方を知り、それぞれが違う役割を持つからこそ、この世界は豊かで、協力していけるのだと思えました。

これからも私たちは、生きていく中で様々なことを経験していきます。当たり前にあると思っていたことは時として変化し、未来は誰にとっても不確定です。不安や恐れを感じることもありますが、それでも今は、周囲と手を取り合うことで前に進んでいくと信じています。

専修大学での学生生活を終えた今、私は、自分が自分として生きることを大切にしながら、どんな時も、頼り頼られ、お互いを

尊重しながら支え合える社会を築いていきたいと思っています。目の前の幸せを大切にし、それぞれが感じる問題を原動力としながら、社会の一員として、今より少し先の未来を皆で作っていかれたらと思っています。

最後になりましたが、こうして卒業を迎えられるのは、支えてくれた家族、今日までご指導くださった先生方、様々な場面で私たちをご支援くださった職員の皆様と、共に学んだ仲間たちのおかげです。

思い描いていた学生生活とは違いました。それでも、大学や先生方の大きなサポートの下、新しい方法で学び続け、励まし合い、一人ひとりが様々な思いや問題意識をもって過ごした時間は、決して、「失われた学生生活」ではありませんでした。卒業生・修了生を代表して心よりお礼を申し上げます。そして母校となる専修大学の更なる発展を祈念し、謝辞と致します。ありがとうございます。

令和五年三月二十二日